



いたく母に叱られた幼い日  
かんしゃくを起して  
父の大切な湯呑みを割った  
黒ずんだ荒れた掌で  
黙って破片をかき集めてる母  
破片の上にポロポロと  
涙を落すのを見た  
母のすすり泣く声は  
幼い私の胸をえぐった  
落陽が母の横顔を紅に染めた  
はるかにも遠い幼い日  
私は声を挙げて泣いた  
ごめんなさいお母さん  
六十路のいま  
声を限りに泣きたい  
あわれ大慈大悲よ

遠藤太禅「観世音声を限りに」より